

花みづき

第27号/2013.4.1

白梅学園大学・短期大学図書館
小平市小川町1-830 TEL.042-346-5626

「本が読める」のは 「当たり前のこと」なのか

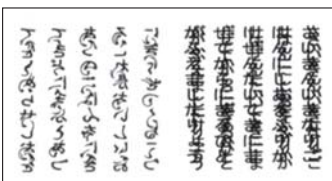
発達・教育相談室室長 市川 奈緒子
子ども学科 准教授



私たちは、幼少期から勉強や楽しみのために多くの本（活字）を読んできています。時折、難しい文章や難しい漢字につまづくことがあっても、「本が読める」のは、識字教育が行き届いているこの社会にいる私たちにとっては、ごく「当たり前のこと」の1つでしょう。

しかし、識字教育は受けており、いわゆる視覚的なハンディキャップを持たないけれど、「本を読む」ということに大きな困難を持つひとたちも実はたくさんいるのです。「読み障害（ディスレクシア）」という診断を持つ、またはそれに似た傾向を持つひとたちです。

次の図を見てください。これは「怠けてなんかない！」という本に載っているもので、ディスレクシア



と診断されているひとたちに、文章がどのように見えているのかを推測して書かれたものです。

このひとたちは、いわゆる視力検査ではとくに何も指摘されません。見えないのではなく、「見て認識する」というところに困難を持つと言えます。原因はわからないことが多い上、同じ診断名を持っていてもひとによってその様態はさまざまです。図と地の認識の困難、パターン認識の困難、方向性の認識の困難、文字と音とのマッチングの困難等があり、またそれらのいくつかを重ねて持っているひともあります。欧米では、以前から10～15%程度のひとがこうした困難を持つと言われてきましたが、日本ではそれほどの数字が出てこず、日本語の特徴や学習体制が整備されているためと理解されてきた節があります。しかし近年、実は日本でも同じくらいの数のディスレクシアのひとたちがいるのに、まわりから認識されていないだけではないかという声

挙がってきています。前述の本の題名にもあるとおり、このひとたちは「読めない」と理解されず、「怠けている」ために読まないのだと非難・叱責されてきた経緯があります。

「読み障害」や「読み書き障害」というのは、障害と言われるものの中でもおそらくまわりからの理解がもっとも難しい障害だと思います。それは、いつでもどこでも読めないわけではなく、文字の大きさや文字の量、文字と文字の間隔、横書きや縦書きか、まわりの状況（雑音の有無等）、さらには本人の体調などにも「読み」の状態そのものが非常に大きく影響されるからです。私は数年前から小中学校を回って、学習や行動に困難を抱えた児童生徒の相談を受けており、以上のような要素を持った子どもたちにたくさん会いました。なぜ読めないのかまわりから理解しにくいいため、本人も先生方も非常に苦勞されている実情があります。

私たちは自分たちの見ている世界と他者が見ている（感じている）世界は同じだと素朴に信じて暮らしています。しかし、そのひとの感じている世界はそのひと独自のものであり、ひとりひとり違うのが実は「当たり前」なのです。自分の見ている世界こそ「当たり前」なのだという枠を外して、相手の見ている（感じている）世界をイメージしてみることで、その視点からそのひとの生活や経験を味わってみること…ひとと会うということは、こういうことなのではないかと思います。そして自分の「当たり前」に気付いてその枠を外す試みは、自分自身をも、とても自由にしてくれるように思います…対人援助とは、そうした可能性に満ちた仕事なのではないでしょうか。

本文中で紹介した本は図書館に所蔵されています。
品川裕香著『怠けてなんかない！ディスレクシア 読む・書く・記憶するのが困難なLDの子どもたち』
岩崎書店 2003年（分類記号：378/Sh58）

発達臨床学科での学びと図書館

発達臨床学科 卒業生 山下 花櫻

私は、病氣療養中の時に、本のおもしろさをそこで出会った方に教えていただいた。その時、「本の内容がわからなくてもまず最後までとにかく読み終えること。」「同じ著者の本を続けて読んでみることでそれを参考に読み続けること。」「などのアドバイスをいただいた。初めは分からないところがありながら読み進めていくのにとっても抵抗があったが、3冊・4冊目と進めていくうちに1冊目でわからなかったことが、2冊目に、「あーそういう意味だったのか」とわかったり、「〇冊目の△と、ここのところの□は関連がありそう」などといったいろいろな発見をするようになった。その経験を通して本のおもしろさがわかると同時に、読書そのものがたまらなく好きになっていった。

大学入学前に看護学校に通っていたが、臨地実習に通う電車の中で、「自分を含めた人間の心を理解しませんか」という一文が目にとび込んだ。日々患者さんの「治りたい」という気持ちと意欲をどうつなげたらいいのだろうかとか日々考えていたこともあり、「これ、私が知りたかったことだ。」とその一文に釘づけになった。入学前の1月のことだった。

そして、発達臨床学科一期生として入学をした。ここでは発達という概念を基礎に、心理的アプローチを用いて人間のこころや行動について学ぶ学科である。特徴は①心理学の基礎を学ぶ②心理臨床を学ぶ③発達臨床を学ぶ④特別支援教育を学ぶの4つである。

私の4年間の学生生活にとって図書館はたくさんの情報を手に入れられるという意味においてなくてはならない存在であった。授業で紹介された書籍、使用図書教材の参考文献、興味をもったものなどを次々と読んでいった。またレポート作成時や卒業論文作成時には特に私にとって図書館が大きな存在となった。さて、大学生生活を思い出すままに記してみたいと思う。

1年次の「現代子ども学」において「こども」「子ども」「子供」の字のもつ意味の違いを白川静さんの本で知った。この日から白梅の図書館に魅せられ足を運ぶようになった。さらに「教職概論」では、子どもに関する記事をリストアップし、要約したのち、自分の考えや展望をまとめた。図書館には、一般的な新聞の他に『日本教育新聞』、『毎日小学生新聞』など各分野の情報がそろっている。授業の「教育原理」に関連してレジョエミリアの保育に関する本を読んだり、『特別支援学校教育課程論』『光とともに』の本(マンガ)とDVDを見たりして理解を深めた。

2年次、「発達臨床実験法」の授業ではマウスを使っただけの明るさによる弁別学習、短期記憶、脳波測定などを学んだ。授業の「インターシップ」にあたっては、『動物感覚』、『私の障害』、『私と娘、家族の中のアスペルガー』など多数の本を読んだ。

3年次、「発達アセスメント演習」の授業に関連して『河合隼雄と箱庭療法』、『WISC-IV』などの本を読みあさった。「教育の方法」では『エレファントマン』、『エデンの東』、『自転車泥棒』などの映画に興味をもち、時間をつくっては図書館で観ていた。

4年次、特別支援学校の教育実習に向けて調理実習をするにあたり、一食分の献立を作るための基礎として、DVD「家庭科教育実践講座」で心の準備をした。特別支援学校経験者による献立レシピ集は特に子どもにとってわかりやすかった。卒業論文については、2年次より関連分野の文献を収集していった。資料検索にあたり、CiNiiで公開されていない文献は有料で国会図書館などの他の図書館へ依頼することができる。検索方法が分からない時は相談すると、いい方法を教えてもらうことができた。とても気さくな方たちばかりであった。また、各自治体の蔵書状態も確認できるので大いに活用してきた。

同好会では児童詩を学園祭で発表、先輩に切り



先輩が制作した切り絵(中央の仏像)とのコラボ作品

絵を依頼しインパクトのある作品となった。詩と書道をつなげることで表現の奥深さと可能性をあらためて認識することができた。DVD「風の谷のナウシカ」は大のお気に入り、数え切れないほど折りにふれてみた。おかげで自然と人間の関係を深くとらえることができた。楽しさと学習意欲を与えてくれた図書館、ありがとうございました。



インターシップにて子ども達と一緒にれんげで作った花かざり



「箱庭療法」に使用する箱庭の一例

ディスレクシアと図書館

発達臨床学科 4 年 浅見 祐利伽

私は昨年から LD (学習障害) やディスレクシア (読字障害) について学びを深めるようになりました。ゼミや講義などの学びで LD (学習障害) という言葉を知り、それから学びを深めていったのは休暇中でのゼミでの課題で LD についての本を読むようになったのがきっかけでした。本を読んで、LD の定義など基本的な事や生じる困難、その子の困難に対しての支援なども書かれていました。その本の中で「ディスレクシア」という言葉も知りました。ディスレクシアというのは、知的な遅れはないが、読んだり書いたりすることが苦手な方たちのことをいい、「音読作業と意味理解作業が同時にできないため読み書きに時間がかかる」、「読みが出来ないと文字を書くことはより困難になる」などの特性があります。特性は個人差があるのですが、早期から自分に合った教育支援を受け、学習方法を見出すことができれば、自尊心を失うこともなく、その才能を伸ばしていく

ことができるかもしれません。

先日、授業で実際にディスレクシアを抱えている方に来て頂いてお話を聞いたのですが、幼少期の頃の劇の役を演じる際のセリフ覚えの苦労や小学生のころからの勉強面の困難さ、それからの学生生活、お友達、先生、周りの人々との関わりや現在の生活での工夫などたくさんのお話し頂き、自分の中でとても印象的な講義となりました。そして文字がかすんだり、揺らいだり、鏡文字に見えてしまう人もいるということを知り、そのような方たちの読みを補助し、読みやすい学習教材を作成するために、DAISY 図書や iPad、音声図書などを利用出来るサービスが欧米諸国ばかりだけでなく、日本の図書館サービスももっと充実したら良いなと思っています。これからも私を含め、多くの方が特別支援教育などに興味を持った時や子どもたちの支援や指導に役立てるためにも図書館にもっともっと LD やディスレクシアなど発達障害に関する本が増え、理解や支援について考えてくれる方が増えることを期待したいです。

読書で自分磨きをする

子ども学科 4 年 鎌田 雪乃

子どものころ、たくさんの大人から「今のうちからたくさん本を読みなさい。本をたくさん読むことはいいことだよ」と言われました。しかしそのころの私は、本を読むことよりも他の遊びをすることが好きで、あまり本を読みませんでした。小学校の授業の中で、図書室に行って好きな本を読む時間があり、その時は本を読んで、「良いお話だったな。楽しかったな」と思うことはありましたが、自主的に本を借りて読もうという気持ちまではつながりませんでした。

そんな私が、本をたくさん読みたいと思い始めたのはとても最近のことです。文化祭やゼミの先生主催の講演会を聴きに行ったり、学生生活も半分を終え進路を選択する時期になり、進路ガイダンスでいろいろな講演を聴く機会が増えました。その中でいろいろな方の考え方や生き方を知り、私は心を揺さぶられ、自分の知識の少なさや、視

野の狭さに気づきました。そしてもっとたくさんの知識や広い視野を持ち、豊かな人間になりたいと思いました。

講演を聴いたりすることで、心が揺さぶられたり、自分の視野や考え方を広げることができますが、それには時間や機会に限りがあります。でも、本を読むことなら、もっと手近に心が揺さぶられたり、自分の視野や考え方を広げることができると思いました。小説を読んで、主人公の生き方や思いに共感したり驚いたりすること、専門書を読んで、新たな知識や考え方を取り入れることは、自分の視野を広げ、新しい世界を知る一歩になると思います。

私は今になってそのことに気づき、もっと早くから本をたくさん読めば良かったと後悔しました。しかし本を読むことは自分が読みたいと思えば、これからもずっとできることです。私は残りの学生生活、また職業人になった後も本を読み続け、自分自身を豊かな人間にしていきたいと思っています。

図書館と今までの私・これからの私

子ども学科 卒業生 林 由理

私は昔から図書館が大好きです。小さい頃から母とよく図書館に行くことが多く、気に入った絵本を何度も何度も借りて読んでいました。

そして、高校生の頃に、近所の図書館で『MOE』(この図書館にも所蔵されています。)という絵本雑誌に出会い、私は絵本の世界に今まで以上に深く関心を持つようになりました。小さい頃によく読んでいた絵本を読み返したり、『MOE』で紹介されている絵本を読んだりして、私は再びその世界に魅了されたのでした。絵本には決まりごとがなく、ページを開けばそこは無限大の世界が広がっています。それでいて、わくわくしたり、はらはらしたり…私たちに沢山の気持ちを感じさせてくれます。ページを開くとその世界にスリッパするような感覚がとても好きで、例えばその絵本の中で私たちはお姫さまにもなれば、動物にもなれるのです。

私は、そんな絵本の魅力を「もっと探りたい、そして人に広めたい!」と段々と思うようになり、一時期は図書館司書を目指すか本気で悩んだこともありました。けれど、保育士になるのも小さな頃からの夢…そこで、私は保育の現場で使えるような勉強だけでなく、子ども文化という視点からも多く学ぶ機会があるこの白梅学園大学を選んだのです。高校三年生の頃、複数校オープンキャンパスに足を運び、私が必ず確認をしたのは図書館でした。残念なことに、保育を学べる大学でも棚

の一角にしか絵本コーナーがない図書館や、絵本すら置いていない図書館もありました。(子どものことを学ぶのに…なんだか不思議だと思いませんか?) そんな中、白梅の図書館には豊富な絵本、その数は他校と比べると本当に桁違いで、私はオープンキャンパスでこの図書館を一目見たときとても感激しました。そして、ここで四年間学びたい!と強く感じ、即決でこの大学を志望校としたのです。晴れてこの大学に入学することができ、私は沢山の学びを得ることができました。

そして、大学四年間の中で、私の「絵本好き」という芽は様々な方向に伸びてゆき、最終的には、人生の指標ともいっても過言ではないくらい大きな存在となる、“やなせたかし”という作家に出会います。彼の大切にしてきた“抒情”というものは、自分自身が昔からずっと大切にしてきた「自分の感情を素直に述べ表すこと」というものでした。私は、この四年間で自分自身の核となるもの、そしてこれからもなっていくであろうものが初めて明確になったのです。それも、全て元を辿れば図書館がもたらしてくれた出会いです。あのとき、近所の図書館で『MOE』に出会ってなければ私は再び絵本の世界に魅了されることもなかったでしょう。私はその出会いに心から感謝しています。

図書館は、今までもこれからも、私にとってなくてはならない存在です。皆さんも、人生を変えるような出会いや心の琴線に触れる出会いを、ぜひ四年間で見つけてほしいと心から願っています。四年間大変お世話になりました。本当にありがとうございました。



●●●図書・文庫貸出ベスト 10●●● (2012 / 1 / 1 ~ 2012 / 12 / 31)

順位	回数	書名
1位	35回	子どもが語る施設の暮らし
2位	27回	施設で育った子どもたちの居場所「日向ぼっこ」と社会的養護
3位	26回	児童相談所で出会った子どもたち
4位	25回	おおきなかぶ こどものとも傑作集
5位	22回	子どもが語る施設の暮らし2
6位	19回	もう施設には帰らない[1]
7位	18回	虐待を受けた子どもの回復と育ちを支える援助
8位	14回	児童養護施設と子どもの生活問題 第2版
8位	14回	母と子のきずな

久しぶりに絵本がランクインです。4位「おおきなかぶ」の他に、「こんとあき」や「どうぞのいす」なども人気です。

●●●ビデオ・DVD 閲覧ベスト 10●●● (2012 / 1 / 1 ~ 2012 / 12 / 31)

順位	回数	書名
1位	71回	耳をすませば
2位	58回	モンスターズ・インク (ディズニー)
3位	52回	美女と野獣 (ディズニー)
4位	44回	恋空
5位	37回	眠れる森の美女 (ディズニー)
5位	37回	トイストーリー3 (ディズニー)
7位	35回	千と千尋の神隠し
8位	31回	魔女の宅急便
9位	30回	ホーム・アローン[1]
10位	28回	着信アリ
10位	28回	不思議の国のアリス (ディズニー)

2012年に購入した「トイストーリー」が人気です。14位には知的障害者の子育てを描いたドラマ「だいすき!!」など、ランク外ながら学科に関連した資料も利用されています。